

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*三鷹国際報時所跡の建物配置図入手

三鷹国際報時所は、無線報時受信のために東京天文台構内に、文部省測地学委員会によって設置された。アーカイブ室新聞 (2008年6月19日 第27号) に「測地学委員会の三鷹国際報時所備品監守簿発見」という記事を書いた。この中に三鷹国際報時所の設置についてもかなり詳細に記述してあるが、日本は明治22年(1889年)に万国測地学協会に加盟、明治31年(1898年)測地学委員会が発足、大正12年(1923年)に開催された万国測地学協会の決定によって、無線報時を利用する経度決定、時刻統一の国際協力を進めることになり、東京天文台と測地学委員会が表裏一体となって事業が進められ、三鷹国際報時所が大正13年(1924年)に完成したものである。

この三鷹国際報時所は昭和23年(1948年)には、測地学委員会から東京天文台に移管されている。現在はその門柱(写真1)を残すのみである。筆者が昭和30年代後半、三鷹に出



写真1

張した際には三鷹国際報時所跡地にあった東京天文台工作工場で竹田さんに工作の手ほどきを受けたことを覚えている。その頃には、この跡地は東京天文台天文時部経度課が使っていた。東京天文台北本館が完成した後は、天文学会事務所として使用された。

筆者は日本天文学会庶務理事としてこの建物にしばしば入ったが、その建物の配置などの記憶は全くない。その建物の配置図(図1)を元天文台職員の入江氏から入手した。

東京天文台の建物は北本館が建設されるまでは、観測施設を除いた研究室、事務所などはすべて木造であった。昭和20年(1945年)3月8日未明に焼失した本館は立派な建物であったが、その後は広い構内のあちこちに散在したバラックのような木造の建物で研究がすすめられていた。三鷹国際報時所跡地もそのような建物の一つであった。

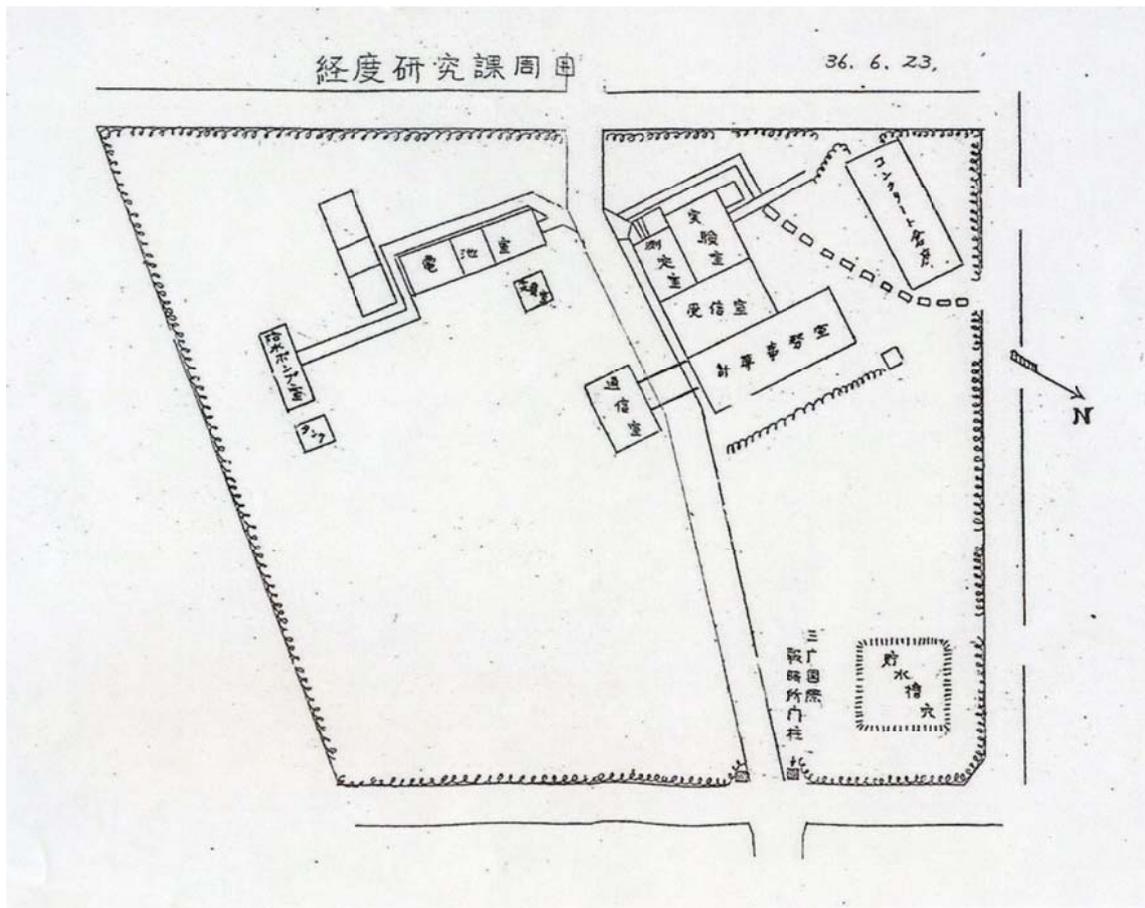


図 1

図 1 が入手した図面であるが、これは北が上になっていないのでわかりにくいので、回転し上を北にしたものが図 2 である。

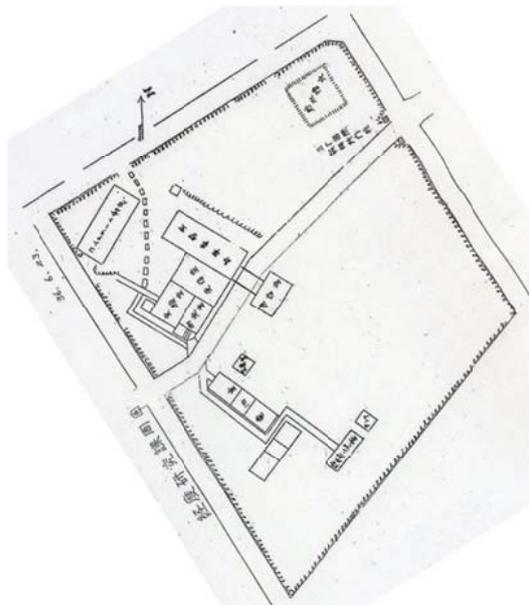


図 2

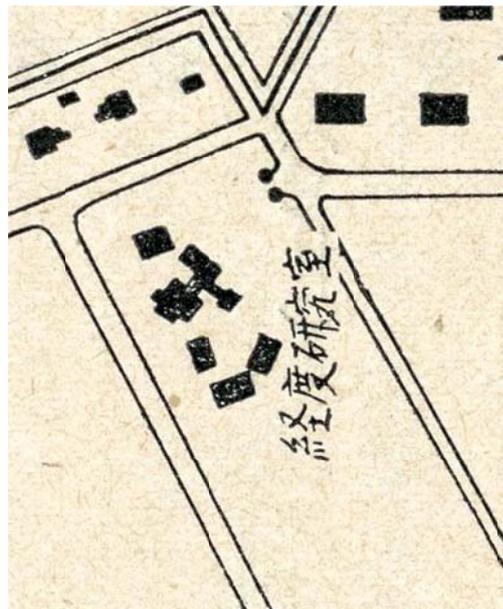


図 3

図3は東京天文台75周年誌の経度研究室の配置図である。三鷹国際報時所正門の右手の道路は国立天文台の桜並木であるから、これはほぼ正確に東西になっているから図3のほうが正しいように思う。

三鷹国際報時所跡地に現存するものは門柱と基線尺倉庫のみである。基線尺倉庫は現在も倉庫として利用されている。昭和28年(1953年)発行の東京天文台75周年記念誌に掲載された東京天文台の建物の配置図の全体が図4である。

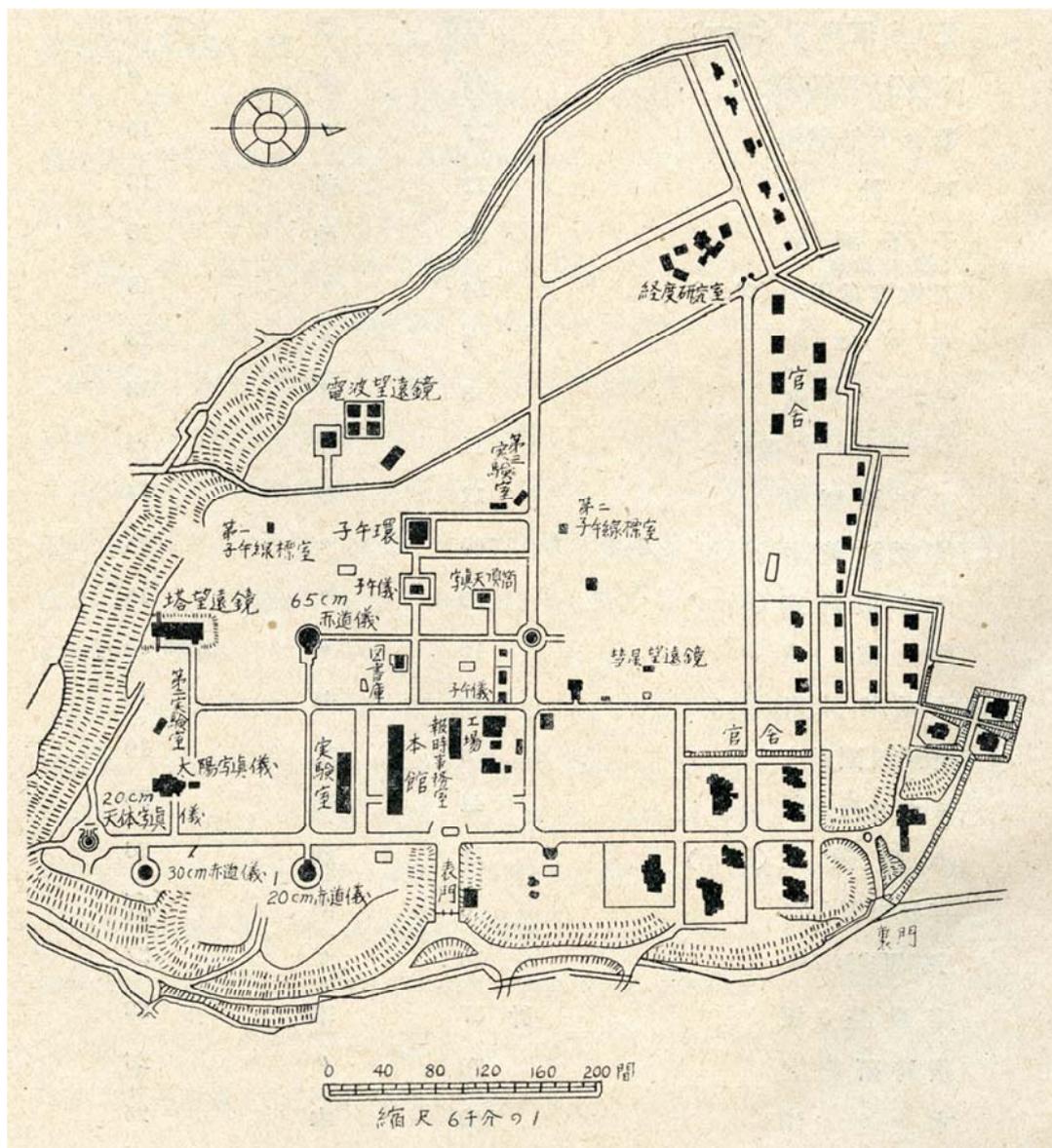


図4

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp